

# 中等教育教科書にみる加賀の千代女の受容

藤原 マリ子

A Study on Trends in the Acceptance of Kaga - Chiyo  
in Textbooks for Secondary Education

Mariko FUJIWARA

(Received September 30, 2005)

## I 問題の所在

江戸中期に活躍した加賀の千代女(1703~1775)は、近世における最も著名な女流俳人である。国内で刊行される俳諧のアンソロジー類においてのみならず、海外で刊行される俳諧の翻訳書においても、千代女の句は女流俳人の代表格にランクされて収録されるのが常である。現行の高校教科書にも、俳諧を採録する4種の教科書に、女流としては唯一人、発句が紹介されている。

しかし、千代女句への現代評価となると、必ずしも肯定的なものばかりではない。女性らしい繊細な感性がほの見える句への高い評価がある一方で、理知の勝った技巧的・通俗的作風が詩趣を損なっているとの批判的見解もまた見受けられる。

大岡信氏は千代女を積極的に評価する立場の一人で、「千代女は、女流としては異例によく知られている人だが、平易でややもすると通俗的という見方が根強くある。通俗を目のかたきにしたのは特に昭和俳句以降のように思うが、千代女の句の清新さは疑いようもない」として「此うへは白きものとしてしぐれけり」の句を例にとり、機知に富み流動感に満ちた千代女句の魅力を高く評価する<sup>1)</sup>。一方、辞書や古典研究書の中には、「小主観を風雅でまぶした俗受けのするものであって、高く評価できない」<sup>2)</sup>「その名声に反して、彼女の俳諧は芸術的に必ずしも高くは評価されぬ。むしろその作品の多くは、詩的価値に乏しいといわざるをえない」<sup>3)</sup>等の、千代女句の通俗性を問題視する否定的な見解も散見される。

すなわち千代女作品に対する文学史上の声価は、知名度ほどには定まっていないのが現状といえる。それにも関わらず、江戸期に高名であった女流歌人・散文家の多くが今日では全く忘れ去られる中で、「幕末維新の頃を除けば、徳川時代の女流文芸家で今日までその名が残り、その作品に親しまれているのは、中期の俳人、加賀の千代だけだということになる」<sup>4)</sup>という地位を、長く保持し得たのはなぜであろうか。

明治以降の俳壇に千代女がすんなりと受け入れられた理由の一つには、正岡子規の千代女への好意的評価の影響が指摘される。月並俳諧に対して容赦ない批判を加え、俳句の革新を唱えて近代俳句界のリーダーとなった子規は、千代女に関しては、「加賀の千代は、俳人中最も有名なる女子なり。その作る所の句も今日残るもの多く、俳諧社会の一家とし古人にゆずらざるの手ぎわは、幾多すうせん男子をして、しりへに瞠若たらしめるもの少なからず。」<sup>5)</sup>と述べて、千代女の声価を近代俳句界に継承させることに貢献した。

また、俳壇の外に目を転じれば、作品の古典化に強大な力を発揮した存在として、近代の教

育制度の影響が挙げられる。近代教育制度のもとで、教科書が国民の教養・思想の形成を担う強力な文化装置として機能し、作品の古典化に大きな役割を果たしたことは、拙稿<sup>6)</sup>の「おくのほそ道」のカノン化の過程分析でかつて指摘した通りである。

そこで本稿では、近代における加賀の千代女の受容実態の一端を、明治以降の中等教育教科書の千代女教材（千代女および千代女句に関する教材を指す。以下、同様）の採録状況の調査・分析を通じて解明を試みる。

## II 千代女教材の採録状況

明治以降の中等教育教科書における千代女教材の採録状況は以下の通りである。

調査対象としたのは、戦前については、中学校・高等女学校用の国語および国文学史の教科書、高等女学校用の修身教科書、戦後については高等学校国語科教科書である。国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館の所蔵になる教科書および教授用指導書を調査した。戦前の国語教科書調査については『旧制中等教育国語科教科書内容索引』（田坂文穂編、昭和59・2、教科書研究センター刊）を、戦後については『高等学校国語教科書データベース』（阿武泉氏制作）を参考にした。

なお、次表における「出典」の項は教科書の記載によるもので、（ ）を付したものは教科書に記載のないものである。「執筆者」の項については以下の略称を用いた。

三熊……三熊思考 坪内……坪内雄蔵（逍遙） 佐々……佐々政一（醒雪）

清水……清水孝徳 藤岡……藤岡作太郎 荻原……荻原井泉水 相馬……相馬御風

### 【A】 国語教科書

#### (1) 明治期

##### ☆ 中学校 教科書

|   | 出版社  | 編者   | 教科書名 | 採録巻 | 発行年月  | 出典    | 教材題名 | (執筆者) |
|---|------|------|------|-----|-------|-------|------|-------|
| 1 | 日本図書 | 上田万年 | 中学読本 | 4   | 44/10 | 近世畸人譚 | 千代女  |       |

##### ☆ 高等女学校 教科書

|    |       |           |            |    |       |        |        |        |
|----|-------|-----------|------------|----|-------|--------|--------|--------|
| 1  | 金港堂   | 新保馨次      | 女子日本読本     | 7  | 28/9  | 続近世畸人傳 | 加賀の千代  | (三熊)   |
| 2  | 国光社   | 西沢之助      | 高等女学読本     | 5  | 30/10 | 続近世畸人傳 | 加賀の千代女 | (三熊)   |
| 3  | 明治書院  | 吉川半七      | 女子国語読本     | 3  | 34/2  | 近世俳人譚  | 千代女    |        |
| 4  | 国光社   | 西沢之助      | 高等女学校用国語読本 | 5  | 34/7  | 続近世畸人傳 | 加賀の千代女 | (三熊)   |
| 5  | 明治書院  | 明治書院編集部   | 高等女子読本     | 7  | 35/10 | 近世俳人譚  | 千代女    |        |
| 6  | 大日本図書 | 下田歌子      | 女子国文教科書    | 9  | 35/12 | (四民論)  | 婦女の心得  | 加賀の千代女 |
| 7  | 明治書院  | 明治書院編集部   | 補習科用高等女子読本 | 上  | 36/6  |        | 俳句     |        |
| 8  | 元々堂   | 元々堂書房     | 高等女学校用国語読本 |    | 36/12 | (国語読本) | 女流の俳諧  | (坪内)   |
| 9  | 明治書院  | 明治書院編集部   | 改訂高等女子読本   | 6  | 38/11 | 近世俳人譚  | 千代女    |        |
| 10 | 目黒書店  | 関根正直      | 女子国語読本     |    | 40/1  | (国語読本) | 女流の俳諧  | (坪内)   |
| 11 | 同文館   | 教育学術研究会   | 明治女学読本     | 7  | 40/10 | (国語読本) | 女流の俳諧  | (坪内)   |
| 12 | 啓成社   | 啓成社編集部    | 帝国女子読本     | 5  | 41/10 | (国語読本) | 女流の俳諧  | (坪内)   |
| 13 | 明治図書  | 下田次郎・尾上八郎 | 女子新読本      | 8  | 41/12 | 国文学講話  | 女子と文学  | (藤岡)   |
| 14 | 大日本図書 | 上田万年      | 高等女学校国語読本  | 10 | 41/12 | 国語読本   | 女流の俳句  | (坪内)   |
| 15 | 啓成社   | 啓成社       | 修訂帝国女子読本   | 5  | 44/11 | (国語読本) | 女流の俳諧  | (坪内)   |

|    |       |           |               |   |       |        |        |      |
|----|-------|-----------|---------------|---|-------|--------|--------|------|
| 16 | 元々堂書房 | 元々堂書房編集所  | 実科高等女学校用国語読本  | 5 | 44/11 |        | 女流の俳諧  | (坪内) |
| 17 | 宝文館   | 関根正直・古谷知新 | 女子国文教科書実科用花の巻 | 2 | 44/12 |        | 女流の俳句  | (坪内) |
| 18 | 開成館   | 福井久蔵      | 実科女子国語読本      | 7 | 44/12 | (国語読本) | 女流の俳諧  | (坪内) |
| 19 | 光風館   | 佐々政一      | 女子国文教科書       | 3 | 44/12 |        | 加賀の千代女 | (佐々) |
| 20 | 同上    | 同上        | 同上            | 8 | 44/12 | 国語読本   | 女流の俳諧  | (坪内) |
| 21 | 光風館   | 光風館編集所    | 女子国文読本        | 4 | 45/4  | 国語読本   | 女流の俳諧  | (坪内) |

(2) 大正期

☆ 高等女学校 教科書

|    |       |           |             |    |       |        |        |       |
|----|-------|-----------|-------------|----|-------|--------|--------|-------|
| 1  | 富山房   | 芳賀矢一      | 新定女子読本      | 3  | 1/10  | 今日の歴史  | 加賀の千代  | (清水)  |
| 2  | 大葉久吉  | 関根正直      | 女子国文読本      | 4  | 2/10  |        | 加賀の千代女 | (佐々)  |
|    | 目黒甚七  |           |             |    |       | (国語読本) | 女流の俳句  | (坪内)  |
|    | 河出静一郎 |           |             |    |       |        |        |       |
| 3  | 成美堂   | 松井簡治      | 女学国語読本      | 5  | 4/1   | (国語読本) | 女流の俳句  | (坪内)  |
| 4  | 元々堂書房 | 元々堂書房編集所  | 高等女学校用国語読本  | 5  | 8/12  |        | 女流の俳諧  | (坪内)  |
| 5  | 同上    | 同上        | 同上・上級用      | 後篇 | 同上    | 国文学史講話 | 女子と文学  | (藤岡)  |
| 6  | 富山房   | 芳賀矢一      | 女子国文        | 6  | 6/10  | (国語読本) | 女流の俳諧  | (坪内)  |
|    |       |           |             | 7  |       | 国文学史講話 | 女子と国文  | (藤岡)  |
| 7  | 光風館   | 佐々政一      | 女子国文教科書・上級用 | 下  | 6/12  |        | 女流の俳句  | (佐々)  |
| 8  | 育英書院  | 保科孝一      | 大正女子国文読本    | 3  | 7/9   |        | 加賀の千代女 | (佐々)  |
| 9  | 明治書院  | 帝国婦人協会    | 日本女学読本      | 7  | 8/10  | 国文学史講話 | 女流文学   | (藤岡)  |
| 10 | 至文堂   | 久松潜一      | 女子新読本       | 6  | 10/10 |        | 女流俳人   | (荻原)  |
| 11 | 啓成社   | 幸田成行      | 訂正大正女子読本    | 5  | 11/10 |        | 女流の俳諧  | (坪内)  |
| 12 | 富山房   | 芳賀矢一      | 女子新国文       | 7  | 12/11 | 国文学史講話 | 女子と文学  | (藤岡)  |
| 13 | 富山房   | 富山房編集部    | 国文 女学校用     | 1  | 14/10 |        | 加賀の千代女 | (佐々)  |
| 14 | 金港堂   | 吉田弥平      | 女子国文読本      | 6  | 14/10 | 国語読本   | 女流の俳句  | (坪内)  |
| 15 | 星野書店  | 吉沢義則      | 女子国文新選      | 3  | 14/12 |        | 女流俳句   | (諸家)  |
| 16 | 修文館   | 藤井乙男・春日政治 | 新編女子国文      | 5  | 15/8  |        | 女流の俳句  | (諸家)  |
| 17 | 明治書院  | 下田次郎・尾上八郎 | 新女子国文       | 10 | 15/10 |        | 女流の俳人  | (荻原)  |
| 18 | 立川書店  | 平林治徳      | 新国文大綱       | 7  | 15/12 | 千代尼発句集 | ほとゝぎす  | (千代女) |

(3) 昭和戦前期

☆ 高等女学校 教科書

|   |          |         |          |   |      |       |        |      |
|---|----------|---------|----------|---|------|-------|--------|------|
| 1 | 宝文館      | 松村武雄    | 最新女子国文   | 3 | 2/9  | 国語読本  | 女流の俳句  | (坪内) |
| 2 | 明治書院     | 明治書院編集部 | 女子国文選    | 7 | 2/10 |       | 女流俳人   | (荻原) |
| 3 | 育英書院     | 保科孝一    | 昭和女子国文読本 | 2 | 3/8  |       | 加賀の千代女 | (佐々) |
| 4 | 星野書店     | 吉沢義則    | 女子新日本読本  | 5 | 7/8  | 国語読本  | 女流俳諧   | (坪内) |
| 5 | 帝国書院     | 笹川種郎    | 帝国女子新国文  | 1 | 7/11 |       | 加賀の千代女 | (佐々) |
|   |          |         |          | 7 |      | 国文学講話 | 国文学と女子 | (藤岡) |
| 6 | 光風館      | 金子彦二郎   | 昭代女子国文   | 1 | 8/8  |       | 加賀の千代女 | (佐々) |
| 7 | 早稲田大学出版部 | 五十嵐力    | 純正女子国語読本 | 1 | 8/8  |       | 加賀の千代女 | (佐々) |
| 8 | 金港堂      | 新村出     | 改訂新撰女子国文 | 8 | 8/9  |       | 女流俳人   | (荻原) |

|    |       |            |               |   |       |               |      |
|----|-------|------------|---------------|---|-------|---------------|------|
| 9  | 湯川弘文社 | 佐々木信綱・武田祐吉 | 最新女子国文読本      | 5 | 9/10  | 女流俳人          | (荻原) |
| 10 | 修文館   | 修文館編集部     | 最新女子国語読本      |   | 9/7   | 千代女           | (佐々) |
| 11 | 富士房   | 芳賀矢一・橋本進吉  | 女子新国文         | 6 | 10/6  | 女流の俳人         | (荻原) |
|    |       |            |               | 7 |       | (国文学講話) 女子と文学 | (藤岡) |
| 12 | 至文堂   | 久松潜一       | 女子新国文         | 3 | 10/7  | 加賀の千代女        | (佐々) |
| 13 | 至文堂   | 久松潜一       | 新女子国文         | 5 | 12/6  | 女流俳人          | (荻原) |
| 14 | 星野書店  | 吉沢義則       | 聖代女子国語読本      | 6 | 12/7  | 女流俳人          | (荻原) |
| 15 | 三省堂   | 安藤正次・東条操   | 新制女子国語読本・4年生用 | 4 | 12/7  | 加賀の千代女        | (佐々) |
| 16 | 育英書院  | 保科孝一       | 新修昭和女子国文読本    | 4 | 12/8  | 千代女の句境        | (相馬) |
|    |       |            |               | 6 |       | 女流俳人          | (荻原) |
| 17 | 富士房   | 富士房編集部     | 新修国文・女学校用     | 5 | 12/12 | 俳句と川柳         | (諸家) |
| 18 | 永沢金港堂 | 新村出        | 皇国女子国語読本      | 5 | 14/10 | 女流俳人          | (荻原) |

## (4) 戦後期 —高等学校・国語科教科書—

|    | 出版社略号 | 教科書番号     | 使用開始年 | 単元名        | 作者       | 掲載千代女句       |
|----|-------|-----------|-------|------------|----------|--------------|
| 1  | 実教    | 高国1278    | 昭31   | 古典7 (近世俳句) | 其角ら6人    | 蝶々や・朝顔に・髪を結ぶ |
| 2  | 実教    | 高国1186    | 昭32   | 古典5 (近世俳句) | 其角ら6人    |              |
| 3  | 秀英    | 高国11-1115 | 昭35   | 近世の文学      | 貞徳ら12人   |              |
| 4  | 右文    | 国II026    | 昭58   | 歌謡・和歌・俳句   | 山崎宗鑑ら11人 | 朝顔に          |
| 5  | 右文    | 国II064    | 昭61   | 同上         | 同上       | 朝顔に          |
| 6  | 右文    | 総合国語II    | 平6    | 俳諧 (発句)    | 芭蕉ら10人   | 朝顔に          |
| 7  | 右文    | 国II543    | 平7    | 古文編        | 和歌       | 其角ら7人        |
| 8  | 第一学習社 | 古典023     | 平15   | 俳諧 春夏秋冬    | 貞徳ら16人   | 夕顔や女子の       |
| 9  | 明治書院  | 古典016     | 平16   | 俳諧         | 貞徳らの16句  | 朝顔に          |
| 10 | 右文    | 古典018     | 平16   | 俳諧 (発句)    | 宗鑑ら10句   | 朝顔に          |
| 11 | 右文    | 古典017     | 平16   | 俳諧 (発句)    | 宗鑑ら12句   | 朝顔に          |

## 【B】 中学校・国文学史教科書

|   | 出版社   | 編者        | 教科書名    | 発行年月    | 教材題名           |
|---|-------|-----------|---------|---------|----------------|
| 1 | 国光社   | 大森弘一郎     | 中等国文学史  | 明35/6再版 | 江戸時代           |
| 2 | 金港堂   | 池辺義象      | 日本文学史   | 明36/8再版 | 江戸時代の文学 俳諧及び俳文 |
| 3 | 学海指針社 | 境野正       | 日本文学史   | 明38/1再版 | 享保天明時代         |
| 4 | 光風館   | 佐藤正範      | 日本文学史要  | 明41/10  | 近世の文学          |
| 5 | 中外図書局 | 塩井正男・高橋竜雄 | 新体日本文学史 | 明38/2   | 江戸時代の韻文        |
| 6 | 中文館書店 | 鈴木敏也      | 中等日本文学史 | 昭12/6   | 近世文学           |

## 【C】 高等女学校・修身教科書

|   | 出版社   | 編者     | 教科書名    | 採録巻 | 発行年月   | 教材題名   |
|---|-------|--------|---------|-----|--------|--------|
| 1 | 広文堂書店 | 深作安文   | 現代女子修身  | 2   | 大15/6  | 「同情」   |
| 2 | 東京開成館 | 大瀬甚太郎  | 女子修身教科書 | 3   | 昭2/9   | 「専念」   |
| 3 | 明治書院  | 朝倉暁瑞ほか | 昭和女子修身  | 1   | 昭11/10 | 「思ひやり」 |

### Ⅲ 調査結果 ー千代女の受容の実態とその背景ー

中等教育教科書における千代女教材の採録状況からは、近代における千代女の受容の実態とその背景が以下のように指摘される。

#### (1) 高等女学校教材としての千代女

戦前期を通じて、千代女を採録する国語教科書のほぼ全てが高等女学校（男子の中学校に対応する女子の中等教育機関。明治28年に「高等女学校規程」制定）用である。男子用の中学校の教科書では国文学史の教科書の一部に千代女に関する記載が見られるものの、国語教科書には千代女関係の採録はほとんど見られない。

この点は、古典の人気教材として戦前から高い採録率をもつ芭蕉の「おくのほそ道」が、中学校国語教科書にも高等女学校国語教科書にも採録されていたのと対照的である。「おくのほそ道」と千代女教材との単純な比較は散文・韻文の違いもあり正確とはいえないが、高等女学校用教科書の古典教材における千代女教材の位置を判断する一つの目安にはなると考えられるので、以下に両教材の採録数を掲出する。「おくのほそ道」の数字は高等女学校教科書における採録教科書数で、前掲<sup>7)</sup>の拙稿から引用したものである。

|        | 明治期 | 大正期 | 昭和戦前期 |
|--------|-----|-----|-------|
| おくのほそ道 | 15  | 21  | 28    |
| 千代女教材  | 21  | 18  | 18    |

高等女学校用教材としては、総じて千代女教材が「おくのほそ道」に匹敵する採録状況を示しているのが注目される。特に明治期では「おくのほそ道」の採録数を凌駕しており、千代女教材が「女子教育用」との限定付きながら、明治に入ってから高い評価を得ていたことを示している。大正・昭和戦前期における千代女教材の採録状況には変化が見られず、高等女学校の古典教材の一角に安定した位置を占めている。

また、戦後の高等学校教材では、俳諧を取り上げる教科書は68点見られるが<sup>8)</sup>、そのうち千代女の句を採録するものは11点である。千代女句の採録教科書数の減少は、新制高等学校の誕生により高等女学校教科書がなくなったことによる影響が大きい。しかし、女流俳人の句を採録する教科書ではその大半に千代女句が含まれ、女流では千代女句のみというケースも多い。前述のごとく、俳諧を取り上げる4種類の現行高等学校国語科教科書には、女流としては唯一人、千代女句が採録されている。採録数は減少しているものの、近世における女流俳人の第一人者としての地位は戦後も依然として継承されていることが確認される。

#### (2) 中学校「国文学史」教科書における千代女

中学校の国語教科書には千代女教材の採録はほとんど見られない。しかし、中学校の国文学史の教科書には、教育図書館所蔵の16冊のうち6冊に千代女に関する記述がみられる。【B】表に見るごとく、国文学史の教科書が明治30年代半ばから40年初めに集中しているのは、明治34年に公布された「中学校令施行規則」の「国語及漢文」の項に「国文学史ノ一班ヲ授ケ」の文言が入り、それに基づく35年の「中学校教授要目」に第5学年の講読の材料として「国文学史」が含まれたことによる。一方、明治40年代以降に国文学史の教科書がほとんど見られなくなるのは、明治44年の「中学校令施行規則中改正」により国文学史に関する記述が削除されたことによる。

千代女を取りあげる国文学史教科書では千代女は芭蕉以後の近世俳壇の主要俳人の一人として解説され、1、2句の発句例が添えられていることもある。芳賀矢一校閲・植野正著の『日本文学史』(学海指針社・明37)には、

眼を転じて俳句の方面を見よ。元禄の後を受けて文壇亦一異彩を放てり。安永天明の頃京都に谷口蕪村あり、江戸に大島蓼太ありて俳風を刷新せり。女流にも有名なる加賀千代女あり。

として、蕪村・蓼太と並び、女流俳人としては千代女の名が挙げられている。千代女はやはり女流の第一人者に位置付けられている。

### (3) 出典の推移からみた千代女教材

千代女教材が最初に見られる教科書は、「高等女学校規程」が制定された明治28年に発行された『女子日本読本』(新保磐次編・金港堂)である。各界の様々な人物の奇異な言行を記した江戸後期の書『続近世畸人傳』(三熊思考・寛政10年刊)から「加賀の千代女」を採録している。

明治30年代までの千代女教材には、引き続き同書からの採録が3点、同書と類似の内容をもつ『近世俳人譚』(著者未詳)からの採録が3点見られる。いずれも千代女の発句を織り交ぜつつ制作にまつわる逸話を紹介するものである。

『畸人傳』『俳人譚』からの採録は明治30年代で姿を消し、40年代からは文学者の執筆になる千代女教材が登場している。明治40年代から大正期にかけては坪内雄蔵(逍遙)の「女流の俳諧」が多くの教科書に採られ、大正期には藤岡作太郎の「女子と文学」や佐々政一の「加賀の千代女」が、昭和戦前期には坪内教材に替わって荻原井泉水の「女流俳人」が人気教材となっている。

「女流文学」というカテゴリーがジャーナリズムの中で一定の概念として確立するのは大正末期とされる<sup>9)</sup>が、俳諧に関しては調査に見るように、すでに明治30年代後半から多くの高等女学校教科書に「女流の俳諧」と題した逍遙の教材が見られる。女流の俳諧が男性俳人による俳諧とは質的にも内容的にも異なるものとして、早くから認識・評価されていたことを物語っている。

逍遙の「女流の俳諧」は、近世の6人の女流俳人の句を取り上げて評を加え、「総じて女は物に感ずること深く、かつ細かき処までも思ひやり届く故に、その詠み出でたる句も、またあはれ深し」として、女性的美質を評価の軸として解説を施すものである。

また、藤岡作太郎の「女子と文学」は、上古以来の女流文学の流れをたどりつつ、近世女流文学の定位を図り、

徳川氏天下を一統して文教を奨励するに至りても、女流文学者にして遠く中古の盛に比すべき者を見ず。中につきて加賀の千代の俳句に於ける、荒木田麗女の歴史に於けるや、やゝ見るべきあるのみなり。

と記して、女流俳人では唯一人、千代女を「やゝ見るべきある」存在と位置付けている。

佐々政一の「加賀の千代女」は、

芭蕉翁以来の名人は、多く男子である。唯此の中にあつて、女流俳人を代表し、今日も世に賞賛されて居るのは、加賀の千代女である。

として、千代女の生い立ちや句の制作に関する逸話を紹介する。

昭和戦前期の人気教材・荻原井泉水の「女流俳人」は、7名の女流俳人の句を取り上げ、簡略な逸話を付しつつ寸評を加え、千代女に関しては、

当時の女流俳家としては、何としても加賀の千代女が傑出して居る。千代の句には女らしい優しさが生きて居る。(略) 男には詠まれない女性独特の境涯がある。

として最多9句を紹介している。その一方で「朝顔につるべとられてもらひ水」の句に対しては「どうも優しすぎて、この優しい気持を見て下さいといふやうな誇張の見えるのが厭味である」との批判を加えているのは、戦後の千代女句への批判的批評に繋がるものである。佐々・荻原の両教材は文学史的位置付けにも言及しつつ逸話を交えた構成となっている。

戦前の千代女教材の内容には、今日の研究レベルからすれば杜撰や信憑性に乏しい記述も間々見られるのであるが、江戸期の逸話・伝説をそのまま採録する段階から、作品批評や文学史的位置付けを含む内容へと徐々に移行・進展していったことが見てとれる。

これに対して戦後の教材では、ほぼ全てが作者や文学史に関する記述を含まず、作品のみの採録となっている。国語科に占める古典の位置の低下や授業時数の減少に伴う古典教材の減少、知識詰め込み授業への反発に基づく文学史の敬遠、鑑賞指導における読者重視による作者の軽視などの諸要因によろうが、教材への興味・関心を喚起し、俳諧の読みの深化を図る視点からは、現在の発句を羅列しただけの採録状況には工夫の余地があろう。

#### (4) 女子教育の手本としての千代女 — 「四民論」と女学校用「修身」教科書 —

高等女学校国語教科書の中には一点だけ、加賀の千代女作とする「婦女の心得」なる教材を採録するものが見られる(下田歌子編『女子国文教科書』明35・大日本図書)。「四民の世に立つ、それぞれの務あり。男に四民あれば、女も亦然り」で始まる教訓的な内容の小論で、士農工商における妻女の務めを説き、一読して千代女作品とは異質なものである。この小論は「四民論」の名で紹介されることもあるが、出典は文政5年に高井蘭山の出した『女古状揃園生竹』に収める「加賀の千代女四民の文」に拠っており、蘭山自身による千代女に仮託した創作であることを大西喜三次氏が指摘している<sup>10)</sup>。有名俳人ながら一市井の婦人であった千代女を、儒者と見まごうばかりの立派な教育者に仕立て上げた偽作である。

千代女の神格化の一端を示すものといえるが、高等女学校用の「修身」教科書の中には同様に、千代女の言行を婦女子の手本として描くものがある。

『現代女子修身』(広文堂書店・大15)では「同情」の項に「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」の句を挙げ、次のように記している。

同情は、ただに同類に向つてのみ注ぐべきものではなく、禽獸・草木にも亦、及ぼすべきものであります。(略)「朝がほにつるべ取られて貰ひ水」、この心があつたればこそ、加賀の千代女は人として懐かしい女性であり、女流詩人として尊ぶべき人格の所有者であつたのであります。

『昭和女子修身』(明治書院・昭11)の「思ひやり」の項にも「朝顔に」句の引用がみられ、ここでは「かよわい生物や植物に対する、あはれみの心を詠じたものであります」とのコメントが加えられている。

また、『女子修身教科書』(開成館・昭2)の「専念」の項には、千代女が「なほ七度の別れなるらむ」の句に前句を付けることを頼まれ、寝ても覚めてもそればかり考えてついに「一重づつ風に吹しく八重桜」<sup>11)</sup>の句を得たとのエピソードを記し、

意外な句が出来たので、彼女は余りの嬉しさに思はず声を立てたが、気がついてみればそれは一場の夢であつた。しかし、夢の間に詠んだ一句は、なほまざまざと記憶に残つて居つた。天は自ら助ける人を助ける。専心事に従へば成功は期せずして得られるものであ

る。

として、専心・精進の大切さを説いている。

「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」は千代女の最も人口に膾炙した句であるが、前掲のごとく荻原井泉水は「優しすぎて厭味」と評し、現代においても批判的な評価が多い。『近世俳句俳文集』(平3刊)<sup>12)</sup>には、「ややわざとらしい理屈があつて、すぐれた句とはいいがたいが、そこがかえって俗耳にはいりやすく、千代女の代表作としてはなほだ有名である」との解説が加えられている。

しかし、戦前においては「朝顔に」の句が、優しい思いやりの深い女性としての千代女像の形成に少なからず加担したことが分かる。「修身」は、中学校・高等女学校の学科目の筆頭に位置付けられ(「教授要目」では修身・国語・と記述される)、ことに高等女学校では毎週の教授時数が中学校の2倍(2時間)配当される重要科目であった。修身教科書への千代女の登場は、国語教科書にのみ登場する他の女流俳人とは異なる千代女の受容の在り方を示している。

##### (5) 教科書にみる千代女像と指導の目標

上記(3)(4)の項で見たように、戦前期の高等女学校教材には、千代女の人となりや発句制作のエピソードを紹介するものが多い。作者の人物像を紹介する国語教材が多いのは、高等女学校の国語教育の目標に「文学趣味の養成」と並び「智徳の啓発に資すること」が挙げられ(高等女学校令施行規則・明34)、「教授要目」に「温良貞淑の女徳を涵養するに足るもの」や「美德善行ある女子の事跡や言行を叙すもの」(明44)、「家庭生活の趣味を向上せしむるに足るもの」(昭12)を講読材料の条件として掲げていたことによる。

高等女学校の教育は「男子は外を務め女子は内を治む」との国家ポリシーに基づき「良妻賢母」の育成をその目標としており<sup>13)</sup>、千代女もこの国家の教育方針に則って、これらの条件を満たす理想的女性として選ばれたと推測される。

実際のところ、千代女は在世中から有名であったにも関わらず、その経歴には不明な点が多く、実像は判然としない。しかし、明治30年代まで女学校の国語教科書に採られ、その後も千代女像の形成に少なからぬ影響を与えた前掲の『続近世畸人傳』では、千代女を次のように描いている。

千代女は少女時代から俳諧に熱心で、蘆元坊に「時鳥」の題で句を詠むように求められ、一晚苦吟して「ほととぎす郭公とて明けにけり」の名句をものした。後に聳どりした時には「しぶかろか知らねど柿の初ちぎり」の句を、25歳で夫に死別した時には「起きて見つねてみつ蚊屋の広さ哉」の句を詠み、生涯、再嫁せずに身を全うした。画を上、讃を下にと求められた時は「朝顔や地に咲くことをあぶながら」の句と画を書いて与える機知を発揮した。「あさがほに釣瓶とられてもらひ水」の句は人口に膾炙して賞せられている。「千なりやつる一筋のこゝろから」(「千なり」は「百なり」の誤り)<sup>14)</sup>の句は、永平寺の長老に一念三千の意を句に作るように言われて詠んだ名吟である。

ここに採録された話は江戸期以来、かなり流布していたものらしく、他の教材にも引用するものがある。佐々政一の「加賀の千代女」や荻原井泉水の「女流俳人」、相馬御風の「千代女の句境」では、上記の「ほととぎす」句の逸話の他に、愛児を失った悲しみの中で詠んだとされる「蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら」の句も紹介されている。

教科書に見える千代女像と、千代女教材に関する教授用指導書に記された指導の目標は以下の通りである。



○ 教科書にみる千代女像（『畸人傳』を除く）

・十八歳の時、良縁あつて他へ嫁いだ。まめまめしく働いて夫・舅姑に事へ、よく其の家を治めたが、其の間にも尚俳句を忘れず、時々金玉の名吟を出しては世間を驚かした。（略）夙く其の夫を失って、たゞ独り残りし男の子に家を嗣がせ、今は心安しと、惜し気もなく黒髪を剃り落して名を素園と改めて、只管風雅の道を楽しんで、安永四年七十余歳で安らかに往生を遂げた。  
（佐々政一・『女子国文教科書』光風館・明44）

・二十五歳にして夫に別る。（略）これより家業を人に譲り、浮世を捨てて尼となり、名を素園尼と号し、心静かに俳味を味ふ傍、画を越後の呉俊明に習ひ、好んで百合を画がいた。

（清水孝徳・『新定女子読本』富山房・大1）

・とんぼ釣けふはどこまで行つたやら

血を吐くやうな悲痛な実感が、主として彼女の芸術的衝動を成してゐる。（略）千代はかくの如くして人として又女としては不幸のどん底を見きはめたのであつたが、その代り俳人として芸術家としては、初めて本当の、そして真剣の第一歩を踏み出すことを得たものと云はなければならぬ。  
（相馬御風・『新修昭和女子国文読本』育英書院・昭12）

○ 教授用指導書にみる指導の目標

・天才でありながら、千代女が廬元坊の門弟たらんとして終に一夜をも明かした熱心な態度を感得させて、芸道修業上の心掛を知らせたい。（略）句を十分味解させて、千代女の人と為りを感じさせると共に俳句作法の一端とさせたい。  
（『新定女子国文備考』金港堂・昭3）

・千代女の略歴を知らしめると共に、

一、俳道を如何に熱心に修業したか。

二、俳人としての偉さのみならず、人間として如何に人格の具つた人であつたか、即ちその貞女ぶり

についても知らしめたい。

（『最新女子国語読本教授参考書』編者の言葉 修文館・昭11）

・千代女の熱心さはまことに尊いではないか。何事にもかうありたいものだ。一句を得るに一夜を費やした熱心さ、名吟は容易に出来るものではない。娘としての千代、妻としての千代、母としての千代、而も終始俳句に生き、芸術に生きた千代であつた。如何なる場合にも芸術を捨てなかつたのが尊い。  
（同上「鑑賞」）

(6) 戦前期における千代女の名声形成の背景

高等女学校教材にみる千代女は、心根の優しい母性にあふれた貞淑な女性として描かれている。「教授要目」が求める温良貞淑の婦徳を身につけた、美德善行の鑑のような女性といえる。

しかし、今日の研究では、夫と死別した時の句とする「起きてみつ」の句は別人の作であることが判明しており、「ほととぎす」「しぶかろか」「蜻蛉つり」の句についても生前の千代女の句集や真蹟等には見えず、千代女の句ではない可能性が高いことが指摘されている。句にまつわる逸話も信憑性が低く、千代女の結婚についても近年ではこれを否定する資料が報告されている。また剃髪して尼に姿を変えたのは、養子夫婦を迎えた晩年のことであることが明らかになっている。

とすれば、戦前の教科書に描かれた千代女像は全くの虚像ということになるが、今日残る千代女の書簡や文献から浮かび上がる千代女像は、句作に熱心であるが家業も怠らず、俳壇の野心や門人を持たず、俳人や知友との交流を大切に、書や画を嗜み、何度か社寺参詣と俳遊を兼ねた旅にも出ている、常識的な町人層の婦人の姿である。

確かな経歴が伝わらず、これといったゴシップやスキャンダルも聞こえず、容貌にも難のない女性であつたらしい<sup>15)</sup> ことが、千代女像の形成に奔放な想像の余地を与えたのではなからうか。江戸期の、千代女の才能を誇張した逸話・伝説や、「お千代さんさぞ眠かろう時鳥」「お千代さんつるべを隠してたねをまき」「お千代さん蚊屋が広げりや這入らうか」といった気安い川柳は、そうした事情を背景として生じたもののように見受けられる。同様に近代・戦前期においても、千代女は如何ようにも造型しやすい便利な素材として、国家の要請に沿った模範的な理想の女性像に作り替えられたのではなからうか。

国語教科書の教授用指導書では、千代女教材を通じて文学趣味を養成することのほかに、千代女の人格に触れ婦徳を感得させることを指導の目標として明記していた。千代女教材が、文芸教育の対象としてのみならず、人格陶冶の材料としても機能していたことを如実に示している。

すなわち、千代女の名声が、俳諧の声価によってのみならず、近代教育制度が作り上げた婦女の鑑としての千代女のイメージによっても強く支えられていたことを示唆している。近世における女流俳人の第一人者としての千代女の地位が、近代国家の教育制度という権威を背景として、戦前期における婦徳涵養の国家施策により一層堅固なものになっていったことが推察されるのである。

## 注

- 1) 千代女の真跡には「朝がほやつるべとられてもらひ水」の句形のものもある。千代女生前の『千代尼句集』には「朝顔に」の句形で載り、現行教科書では全てこちらの句形を採用している。
- 2) 大岡信・2002・『朝日新聞』11月6日付け朝刊・「折々のうた」・朝日新聞社
- 3) 浅田善二郎・1958・『日本歴史辞典13』・河出書房新社
- 4) 丸山一彦・1969・『日本女流文学史』・「加賀の千代」・同文書院
- 5) 中谷孝雄・1958・『日本女性史』・「加賀の千代」・ダヴィッド社
- 6) 『正岡子規全集』（1931・改造社）第1巻「加賀の千代」より。
- 7) 藤原マリ子・「中等教育国語教科書にみる『おくのほそ道』」「指導法の変遷にみる教材『おくのほそ道』（『『おくのほそ道』の本文研究—古典教育の視座から—』2001・新典社所収）で分析を加えている。
- 8) 平成14年までは前掲の『高等学校国語教科書データベース』（阿武泉氏制作）に基づく調査。現行教科書に関しては藤原の調査による。
- 9) 鈴木登美・1999・『創造された古典—ジャンル・ジェンダー・文学史記述』・「ジャンル・ジェンダー・文学史記述」・新曜社より。
- 10) 大西喜三次・1954・『俳道57』9月号・「千代尼通説の誤謬」・俳道発行所
- 11) この句は『加賀の千代全集（増補改訂版）』（中本恕堂・1983・北国出版社）には記載されていない。
- 12) 栗山理一・山下一彦・丸山一彦校注・1991年の第17版より引用・『日本古典文学全集 近世俳句俳文集』・小学館
- 13) 井上哲次郎の『勅語衍義』（1891）では「夫ハ外ニ出デ、業務ヲ営ミ、婦ハ内ニ居テ家事ヲ掌リ」と記されている。同様の趣旨は高等女学校の修身教科書にたびたび記載されている。また、文相・樺山資紀は、高等女学校の教育の主旨を「高等女学校ノ教育ハ、其生徒

ヲシテ他日中人以上ノ家ニ嫁シ、賢母良妻タラシムルノ素養ヲ為スニ在リ」と言明している（『教育時論514』1899・7・25）。

- 14) 千代女生前の句集である『千代尼句集』や真跡類には全て「百なりや蔓一すぢの心より」の句形で載る。「千なり」は明らかな誤り。
- 15) 千代女の容貌については美女説と醜女説との両方があるが、美女説の方が多い。千代女と面識のあった康工による『俳諧百一集』（宝暦14年自序）に付す挿絵では、臍長けた老尼に描かれている。容貌にはこれといった難はなかったと見てよいのではないか。